

ミライロと関鑑

次世代を担う学生が成長企業を取材し、自分が将来活躍するフィールドを探しに行くコーナーです。



学生スタッフ NPO 法人学生ネットワークWAN



取材 株式会社岡野
代表取締役社長 岡野博一さん

■今月の取材先 株式会社岡野 とは？
今年、設立から121周年目を迎える博多織の織元。現在は着物全般のアイテムを取り扱っており、多段階流通が多い業界の中で、初めて製造と小売を自社で一貫させる。昨年は六本木ヒルズとGANZA SIXに店をオープン。777年の歴史をもつ、伝統工芸品「博多織」を世界のハイブランドとして提供することに挑戦している。

「13年間の赤字経営からの脱却。世界ブランドを目指す。」

(東京で起業した岡野さん。お父さんの影響から会社を引き継ぎます。)赤字から抜け出すために、最初に人員整理をしたとお伺いしました。ずっと働いた人にやめてもらうのは、すごく大変そうですね。

会社は、潰れてしまうとそこで働いている人全員の拠り所がなくなってしまいます。当時、岡野は能力として7人乗りの船に14人乗っている状態だったので沈没しかけていました。だから、全員死ぬか、残る人だけ残って新たな販路を開拓していくことにかけるか、もうそれしかありませんでした。実は追い込まれている状況を共有しているときこそ、経営者は社員に一番話しやすいです。会社が儲かっているときは、みんな危機意識がありません。しかし、トップは常に、「今はよくても3年後5年後にどうなるかわからない」という危機意識をもっています。そうすると、今から手をうちたいんです。しかし、社員にその危機感がないと聞く耳をもちません。ところが、会社が廃業するかもしれないという意識を共有していると状況は違います。だから、話を聴いてくれるという状態はできていました。そういう意味ではそこまで大変ではありませんでした。あとは、誠心誠意正面から話しました。

その後、「エルメスのような世界ブランドになる」という長期的なビジョンができたんですね。

やはり、人間はビジョンがあると士気があがります。例えば、「毎日あと10年間雨です」と言われたら嫌ですね。「今日は雨でも明後日は晴れる」という期待値があるからこそ人間って頑張る

るわけです。当時、うちの伝統工芸の会社は未来に希望がありませんでした。だから、希望になるビジョンが必要でした。会社の大きい小さいに関係なく、ビジョンを立てることが僕が一番大切だと思います。

ビジョンのヒントは世界的な有名ブランドがどうやって生き残っているかでした。かの有名なエルメスの最初は、馬具のメーカーでした。しかし、車が普及すると馬車に乗る人は減り、当然馬具は売れません。そのため自分たちのもっていた(馬の上の座るときに使う)鞍を縫う技術を使って「オータクロア」というバッグをつくりました。それが、たまたま世界で評価されて、今のエルメスになっています。では、日本の伝統工芸の生き残り方はなんなのだろうと考えました。その一つが「エルメスのようなハイブランドになる」ということです。伝統工芸も世界の市場の中で自分たちの技術を付加価値として買ってくれるような方々を相手にした商売に切り替えていく必要を感じました。私は着物を着る人がこれから増えるとは思っていません。だからこそ、着物ではない世界の人自身が着けているもの、スカーフやネクタイを博多織でつくって販売しています。

ビジョンを立てたとき、「無理でしょ?」といったネガティブな意見がありましたか?

もちろん、ありましたね。だから、「世界ブランドになること」を方針として決めて、社内に発表した後、スモールステップを考えました。「まずは博多織で、<利益・評判・品質>この3つで日本一

になりましょう」と。僕は「世界ブランドになる」というモチベーションで動いていますが、現場はそれだとイメージがしにくいので、「社長がなんか言っている」くらいの認識をしてもらっています。今は、一番になりつつあるという感触があるので、今度は「着物で一番になること」に挑戦しています。これを早く仕上げたいです。その次は日本で一番のブランドになり、最終的には世界ブランドとして成功したいです。

「歴史的な文化と伝統を守ろう。」

着物というと平安時代の印象が強いですが、2018年のブランドテーマは「縄文時代」でした。なぜそのテーマにされたのですか？

実は今、縄文時代から続いている日本の文化が大事なのです。日本では縄文時代が12,000年くらい続きましたが、弥生時代からはまだ2,000年くらいしか経っていません。日本って、80%くらい縄文時代なんですよ。僕は、みんな弥生時代以降の日本の話をしていて、長く続いた縄文時代の話はしてないような気がして、バランスが悪いと思うんです。縄文時代は、12,000年の間に一度も戦争の形跡がないんです。なぜなら、その時代の人々には、自然をいじらずに必要なものだけをとる知恵があったからです。しかし、弥生時代になると田んぼや畑をつくり食糧を備蓄するようになります。すると食糧をいっぱいもっている人もっていない人の間に格差が生まれて戦争が起こるようになりました。さらに、森林を伐採して土地を増やし、川の流れを変える灌漑など、自然破壊を行うようになりました。現在、限られた地球の資源をみんなでシェアしないとイケない閉鎖系の世界に突入しています。その「閉鎖された中でいかに効率よく、みんなでシェアしていくか」が人類を存続させるカギです。実は、縄文時代の人もお互いに必要なものを分け与えていたんです。日本の「縄文時代」はこれから世界の人達に一番響く哲学になるんじゃないかなと思います。

岡野さんの今までのお話やお店の商品・作品を見ると、伝統や歴史を大事にしながらオリジナリティを保つこだわりがみられます。そのようなこだわりを追求する企業風土はどうやって根付くのでしょうか？

「伝統」の意味をしっかりと考えています。「継承」「伝統」「伝



説」「神話」の4段階があります。「継承」は1を1で伝えることです。「伝統」は、<伝えて統合する>という意味です。この字の意味には古いものを受け入れて、<新しい時代のなにかを付け加えて次に伝えなさい>という意味が含まれています。「伝説」は、思わず人に話したくなるようなことです。より多くの人に広まります。「神話」は、神社ができて、みんなが拝みに来てお金も払ってくれる、最高の世界ですね(笑)僕は、伝統を守るために、伝統をつくるのではなく、伝説をつくる試みをしています。

「続けることに意味があるんですか？」という質問がたまに來ますが、皆さんがなぜ生きているかという、命が続いてきたからでしょう。命がずっと途切れなかったからこそ、今があるとするなら、「続く」ってそれだけで素晴らしいことじゃないでしょうか。だから、**続けるというプロジェクトに参加するのはすごく価値のあることだと思っています。**

僕にとっては「文化」を続けることが凄く大切です。「文化」とは、<世界中に気候風土があり、その土地にあわせた暮らし方があり、多種多様な道具がでてくる>、これが連続的にずっと続いていくことです。文化は多様性ですが、文明は画一性です。この両方はどちらも大事ですが、今は文明に力が入りすぎているから、文化を大事にしてバランスをとらないといけません。文化はやるか・やらないか、文明はできるか・できないか。人類を滅ぼすことは今文明的な捉え方をすると、化学兵器などを用いて簡単にできます。でも、文化的な捉え方をするとしない。その選択には、人間の意思があります。もっと文化を保つ意思表示を大事にしていかないとイケないのではないのでしょうか？

最後に、岡野さんの職場では、日本で最年少の女性伝統工芸士の輩出など、若い人も活躍しています。人材育成で気を付けていることはありますか？

人は、育てることはできません。自ら育つものです。気づかせてあげる場をきちんと提供してあげればいいのではないのでしょうか。それは社内であっても社外でもいいです。仕事より人生のほうが明らかに大事ですからね。その人が人生をどう生きるかを真剣に考えればいいと思います。社員の中で夢のスケールの大小はありますが、そのスケールの中で覚悟して目の前のことに、取り組んでくれていれば十分です。



■NPO法人学生ネットワークWAN とは？
設立16年目を迎える学生主体のNPO。「学生だから～できない」「地方だから～できない」を変えるべく全国19地域の情報発信支援や、地域の関係人口をつくるコンテンツ企画運営をしている。私たちの運営するサイト「ガクログ」もぜひCHECKしてください！

岡野氏のインタビューの続きや若い世代に向けたメッセージをもっと読みたい方はこちらのQRコードからご覧いただけます。<http://www.gakulog.net/>

